

書評

上田信著

『歴史総合パートナーズ①』

歴史を歴史家から取り戻せ！

— 史的な思考法 —

(清水書院、二〇一八年)

藤野 裕子

「歴史は暗記物」、自分とは関係ない過去の話。そう思っていますか？。本書はこの問いかけから始まるシリーズ「歴史総合パートナーズ」の第一巻として、二〇一八年八月に刊行された。「歴史総合パートナーズ」は、その名のとおり、二〇二二年から高等学校の必修科目となる「歴史総合」を視野に入れ、歴史との新たな向き合い方を読者に示すことを目指している。

「歴史を歴史家から取り戻す」とは、いったいどのような意味なのか。本書の目的は、先行きの不確定な現在という時代に必要な「史的な思考法」(「歴史的なものの方

とも言い換えられている)を読者に提示することにある(七頁)。歴史家によって作り上げられた既成の歴史をただ覚えるのではなく、読者一人ひとりが各々の力で歴史を編み上げられるように、必要な考え方を提示するというのである。「歴史を考えることを、歴史家の特権としてはいけません」(一九頁)。歴史は歴史家の専有物ではない。読者が「歴史を歴史家から取り戻す」ためには、歴史を暗記しようとする読者だけでなく、活字をとおして一方的に研究成果を教え諭そうとする歴史研究者も、その態度を改めなければならない。だからこそ、本書のタイトルは、読者に対して、歴史研究者に対しても挑発的に聞こえるのである。

*

それでは、本書は具体的に何をどのように提言しているのだろうか。第一章「私たちはどこから来たのか、私たちは何者か、私たちはどこへ行くのか」では、読者の視線を「ヒト」「現生人類」という種の単位に移し、自己を客観的に捉え直すように導く。今から約一六万年前に誕生した現生人類の歴史を一人の人間の人生に置き換えれば、現在は自らを滅ぼす力(「自殺する力」)を身につけた「青年期」である。例えば一九世紀から起きた人口の爆発的な増加によって、核兵器の開発によって、産業活動が引き起こす地

球の温暖化によって、種としての存続が（他の種をも巻き込みながら）危ぶまれている。こうした状況だからこそ、「よりよい一步を踏み出す」ために、歴史から学ぶことが必要なのである（一六頁）。

先述したとおり、その作業を歴史家に任せてはならない。第二章「歴史を造るのは誰か」において、E・H・カー『歴史とは何か』の中から、「クレオパトラの鼻」の高さは歴史家にとって重要な要素ではないと説明するくだりを著者は批判してみせ、著名な歴史家の言であっても、いかに再考の余地があるかを読者に示す。5 W 1 H からの問いによって、出来事は歴史的に意味ある「事件」と認識されるようになる。著者はサイバネティクスを参照して「非連続的变化」という考え方を提示し、非均衡状態では本来に些細な出来事でさえ大きな変化を引き起こすのだと述べる。したがって、クレオパトラの鼻が低かったらという一見取るに足らなく思える要素であっても、大きな変化を引き起こしうるのである。

第三章「世界史から私たちの歴史へ」では、史的唯物論の発展史観、世界史システム論、アナール学派、近年のグローバル・ヒストリーを取り上げ、それらのいずれもが、歴史の変化に関する説明が弱く、どうしたら構造を変えられるのかという視点が抜け落ちていると指摘する。

それでは、歴史家のいうことを鵜呑みにせず、自らの力で歴史を作るには、どうすればよいのだろうか。一人ひとりが自ら歴史を紡ぐために重要なのは、自らがいる「ここ」と、他者がいる「そこ」とが、それぞれに世界の中心（「地球の真ん中」）であるという前提のもと、「ここ」と「そこ」とをつなぐ史的な思考法だと著者はいう。その思考法として、①「ここ」と「そこ」をつなぐ出来事を見つけること、②出来事を名付けること（what）、③出来事を時間と空間の中に位置づけること（when, where）、④出来事に登場する人物を網羅すること（who）、⑤モノ・イミ・ヒトの三つの位相から出来事を探ること（why, how）、⑥出来事の連鎖から歴史的に存在するシステムを再構築することを挙げる。このうち、⑤のモノ・イミ・ヒトの位相について、第四章から第六章までを使って、より踏み込んで説明している。

第四章「モノの位相」では、ヒトは一つの種であるという視点から、地球単位でのさまざまな有機物・無機物の生態システムに言及する。食物連鎖を含めた物質の循環する空間を「生命地域」とすれば、ヒトの活動はしばしば生命地域の生態システムを脅かし、危機をもたらす。生命地域を越えて行われる交易では、ヒト自身の手で秩序が造られ、それを記録するために、簿記や法律などの文字を使った文

明が生み出される。文明は人為的に造られたものであるため、交易の変化によって容易に崩壊することになる。

第五章「イミの位相」では、虹色の色数の差異などを手がかりに、言語論的なイミの体系について解説する。重要なのは、グレゴリー・ベイトソンを取り上げて、イミの体系において「非連続的变化」がいかに起きるのかに言及している点である。ここでも、既存のシステムが機能不全に陥った際に、極度の緊張感のなかで、新しいイミの階層へと飛躍するのだと説明される。

第六章「ヒトの位相」では、歴史研究では「英雄史観」と退けられがちな人物史について、第五章で説明したイミの体系を取り入れることで新しい描き方ができると提言している。「人格」なるものは、さまざまな社会的属性から成り立っているが、それらを一つの個にまとめあげる動きを「認同」と呼ぶ。一個人は他者から与えられた（他者との関係によってつくられた）多様な属性・呼称を持つ。この呼称を手がかりに他者との関係を読み解くことで、社会関係から成り立ち、社会関係に葛藤する人物史を描き直すことができる」と説く。

こうして、モノ・イミ・ヒトの位相からアプローチする史的思考法には、どのような意味があるのだろうか。「おわりに」において著者は、私たちがいる「ここ」から、「そ

*

一瞥してわかるように、本書は歴史を暗記科目だと思っている／思ってきた読者に、大きな驚きをもたらすだろう。歴史を考えることが必要だといっても、緑や赤のシートで、教科書・参考書の文字を隠して勉強した経験を持つ人にとっては（私もそうだが）、歴史をどのように考えればよいのか、どうすれば歴史を考えることになるのか、イメージが湧きにくい。そうした読者のために、本書はさまざまな仕掛けを用意している。

その一つは、およそ歴史とは無関係に思えるようなもの

も含め、図表を多用していることである。ゴギヤンの作品にはじまり、世界の人口爆発を示すグラフ、「ルビンの杯と顔」などである。著者自作の図も五点ある。それらは時に話の切り口として、時に史的思考法を図解する資料として用いられている。一見歴史とかけ離れた図表で史的思考法を解説することで、歴史に対する読者の固定観念を崩していくのである。

大学に入ってから学ぶ著名な歴史家や通説を率先して疑ってみせることも、歴史家の特権性に関する読者の固定観念を溶かす仕掛けといえる。そのうえで、読者に手ずから歴史を作り上げるための方法を説くのである。本書はその方法を、5W1Hを使い、簡条書きにして提示する。あの種のマニュアル化である。「背中を見て学ぶ」式の職人的な訓練によって身につくと思われがちがな歴史的な思考法を、あえて簡条書きで端的にまとめることで、誰もが使えるものにする。これも本書の仕掛けの一つである。

もちろん、マニュアルにまとめられていることは、簡単ではない。「出来事」と「事件」の差異、「ヒト」「イミ」「モノ」として抽象的に提示された用語は難解である。しかし、歴史という言葉から思い浮かべる固定化されたイメージを手放し、歴史的な物事の捉え方を読者が自覚的に再構築するために、物事を認識する仕組みそれぞれ自体を分節化し、対

象化する必要がある。そのために、本書は歴史学のみならず、ノバート・ウィーナー、レヴィ・ストロース、グレゴリー・ベイトソンなど、さまざまな理論を踏まえて、物事の認識の仕方を解剖してみせる。本書には参考文献一覧こそないが、参照している文献数が多岐にわたることは一読で瞭然とする。博覧強記な書き手のみがなしうる業といえよう。

このようなさまざまな仕掛けによって、本書は読者が自ら歴史を思考する方法を解説し、「歴史を歴史家から取り戻す」ことを促す。歴史を学ぶとは、教科書に代表される既成の歴史叙述を暗記することだという読者の認識は大きく修正されるに違いない。大学で学ぶ歴史研究はもちろん、高校での歴史総合においても、本書を読めば取り組み方が変わるだろう。その意味で、本書は「歴史総合パートナーズ」というシリーズの第一巻を飾るにふさわしい。

*

本書が提示する「史的思考法」は、抽象度の高さに特徴があることは明らかである。この抽象度の高さこそが、読者の固定的な常識を揺るがすのであるが、一方で、本書を読み解くには相当な集中力と咀嚼力が必要となる。

歴史研究の業界にいる者にとっては、自らの経験に引き

つげながら、抽象度の高さを具体的な次元に落とし込むことが可能である。だが、史的事実であることと思考することが一致していない読者にとっては、どうだろうか。本書の議論はあまりに遠回りに思えるかもしれない。それにもかかわらず本書を冒頭から末尾まで読破できるとしたら、歴史を知ろうとする強いモチベーションを持つ人物であろう。あるいは、相応の解説者とともに共読することもあり得る。いずれにしても、歴史に対する固定化されたイメージを溶解させようという著者の試みは、そうであるがゆえに、読者がそこに入り込みにくくなる側面を不可避にはらんでいる。

その意味で、本書のような試みには、読者の固定観念を溶解させ、再構築するための仕掛けとともに、読者が叙述に入り込むためのフックを丁寧に仕込むことが重要となるだろう。抽象度の高い議論を避けるべきだというのではなく、抽象的な議論が読者とのように関わるのかを実感しやすくする叙述上の工夫が必要だと思うのである。

そのヒントの一つは、「歴史総合パートナーズ」の巻頭文に含まれている。「身の回りの物事や出来事を探っていくと、きっと奥深い歴史が見えてくるでしょう」。隣接学問の成果を含めた抽象度の高い議論を導入することは、確かに歴史のイメージを根底から覆す力がある。しかしより

読者が入り込めるフックを設けることを意識するならば、同じことを日常から考えられるような議論の組み立て方が有効に思われる。何が日常的で何が抽象的かは、読者の置かれた状況によっても異なる。だからこそ、さまざまなフックが必要なのである。

「歴史総合パートナーズ」の他の巻も参考になる。例えば、飯島渉『感染症と私たちの歴史・これから』（第四巻）では、ヨーロッパやアメリカを中心に描いたマクニールの議論を紹介したうえで、日本から見た感染症の歴史を著者が叙述するのだが、本論に入る前に「この時代区分はマクニールとは少し異なっています。どこが違っているのか、それは何故なのかをぜひ考えてみてください」と問いかける（一〇頁）。こうした問いかけは、活字をとおして読者が思考する主体となるように促す作用がある。

そう、書き手にとって読者は客体であるが、本書は読者という客体を思考する主体にしようとしている。このねじれをどのように捉えるかが鍵となる。このことを手がかりに、議論をさらに広げてみよう。

本書が「歴史を歴史家から取り戻せ」と呼びかける時、「取り戻す」主語はもちろん読者である。だが読者にそう呼びかけ、マニュアルを提示するのは、歴史家にほかならない。次のように問うこともできるだろう。この構図を維

持したままで、読者は歴史家から歴史を取り戻すことができのらうか。挑発的なタイトルにもかかわらず、結局のところ、歴史家は特権的な語り手の位置にいつづけたまま、読者に思考法を教え論じているのではないか。裏を返せば、次のような問いも生まれる。本当に読者が歴史家から歴史を取り戻したら、それは歴史家の望む歴史とはかけ離れたものになり、時に葛藤を呼び起こすのではないらうか。その時、歴史家はいったいどのような態度をとればよいのだろうか。

本書はどちらかといえば、安泰な位置から「史的思考法」を読者に説いている。しかし読者が「歴史を歴史家から取り戻す」という事態は、歴史家の位置そのものを揺り動かすはずである。こうしてみると、本書の提言は、第九巻の渡部竜也『Doing History—歴史で私たちに何ができるか?』とも呼応し、歴史学という学問全体への問いかけをも含んでいる。

本書の延長線上には何があるのだろうか。読者のつくりあげた歴史と歴史家がつくりあげてきた歴史とを突き合わせ、対等に対話・議論する未来があるのだろうか。それとも、読者と歴史家が対話と議論を重ねながら、ともに歴史をつくっていく「共作」という作業が待っているのだろうか。重要となるのは、「歴史を歴史家から取り戻せ」とい

う呼びかけだけに終わらせず、読者がつくりだす歴史を歴史家が正面から受け止めることだろう。

そうだとすれば、この「歴史総合パートナーズ」に、そうした共作や対話自体を取り上げる巻が含まれてもおかしくない。もはや歴史叙述は歴史家を書き手とするモノローグではすまなくなりそうだ。複数の声が登場するような叙述スタイルすら生まれてくるのではないか。

本書を一読すると、歴史を書く際に、読者がどのように思考するか、どうすれば読者を思考に導けるかを意識せずにはいられなくなる。そうした本書に触発されて、本稿ではおもに読者へのフックについて、そして読者が本当に歴史を取り戻した時の歴史家の立ち位置について、話を広げてみた。これからも続々と刊行が続くであろう本シリーズとその読者に、何らかの寄与するところがあれば幸いである。

(東京女子大学現代教養学部准教授)